

実践報告

三重大学東紀州教育学舎による国際交流支援 — 三重県のへき地の子どもたちに「英語が通じた！」体験を —

大野恵理・服部明子・須曾野仁志・萩野真紀・榎本和能

Supporting International Lessons between Schools in Japan and Taiwan

ONO Eri, HATTORI Akiko, SUSONO Hitoshi, HAGINO Maki, ENOMOTO Kazuyoshi

〈Abstract〉

This is a report on international exchange lessons conducted between schools in Owase, Mie and a school in Taiwan. In 2019, Mie University Higashikishu Satellite Campus (HSC) where 4 of the authors belong to, and Owase Board of Education started to cooperate to promote English education in Kata Elementary and Wauchi Junior High Schools, in response to local people's request to raise children who could be active citizens in both local and global communities. We designed the “nine-year curriculum” in which English was taught for 6 years in Kata and 3 years in Wauchi. After conducting the curriculum for 2 years, the teachers in Kata requested us to arrange international exchange lessons with a school abroad. They hoped for their students to experience to get across meaning in English. Xingda Elementary School in Taiwan was introduced and we supported 2 lessons in 2021. In 2022, a lesson was carried out between Wauchi and Xinda. Based on the questionnaire, 6 out of 9 students felt “I could get across meaning in English.” To have all students feel to get across meaning, we will support the next exchange lesson scheduled in January, 2023.

キーワード：国際交流支援、へき地、台湾、英語、ICT

1. はじめに

第一、三、四、五の著者らは、三重大学東紀州サテライト東紀州教育学舎（以降、「東紀州サテライト」と呼ぶ）の教員である。東紀州サテライトは、三重県南部地域の教育を支援する目的で、「国立大学法人機能強化促進費」の助成を受けて2016年に三重大学東紀州サテライトが設置され、2017年9月より著者らによる教育支援活動が始まった。三重県南部地域は、広大な地域（東京都の半分程度の面積）で、豊かな自然に恵まれている一方で、林業や漁業などの主要産業の衰退により深刻な過疎化が進んでいる。最寄りの高等教育機関の三重大学（三重県津市）や、都市（例：名古屋、大阪等）には、特急や自動車道を利用しても片道3時間以上かかる。

この地域の小中学校46校のうち、25校が「へき地・複式・小規模校」とされ（全国へ

き地教育研究連盟, n.d.)、これらの多くの学校は交通条件および自然的・経済的・文化的諸条件に恵まれない山間地等のへき地に所在しているため、多くの困難な条件を背負っている (文部科学省, n.d.)。

三重県南部地域の 5 市町の 1 つである尾鷲市には複数の小規模校があるが、令和元年に三木小学校、三木里小学校の 2 校が、賀田小学校に統合された。統合に際して、地域住民の要望は「グローバル (世界) でも、ローカル (地元) でも活躍できるグローバル人材の育成」であった。そこで、尾鷲市教育委員会が東紀州サテライトに、グローバル人材の基盤である英語教育についての共同研究を依頼してきた。そこで、東紀州サテライトは地域の要望を反映する形で様々な教育活動に取り組むことになった。

2. 国際交流支援のきっかけ

英語力を付けた「グローバル人材の育成」の基盤としたのが「9 年間カリキュラム」である。これは、賀田小学校の 6 年間、そして賀田小学校の多くの児童が進学する輪内中学校の 3 年間の 9 年間を通して、英語力を身に着けるための様々な学習活動に児童・生徒が取り組むものである。東紀州サテライトでは、令和元年度から 3 年間にわたり、賀田小学校及び輪内中学校の教員と協力して、PDCA サイクルに基づいて、学習活動の計画・実践支援 (出前授業及び教員研修)・評価・改善を行ってきた。

共同研究 3 年目の令和 3 年度の 4 月に、賀田小学校教員と打ち合わせをした際に、「子どもたちに『英語が通じた!』という体験をさせたい」という要望があった。そして、その具体的な方法として、賀田小学校 6 年生と海外の小学校との国際交流授業が提案された。尾鷲市においても、令和 2 年度に小学校高学年で外国語 (英語) が教科化され、GIGA スクール構想で「一人 1 台パソコン」が学校に順次導入され、Wi-Fi を含めた ICT 環境が整備された。こうした環境を考慮して国際交流は可能であると判断し、要望に応える形で国際交流を支援することとした。

3. 国際交流の交流校探し

国際交流の交流校について、賀田小学校からは 2 つの提案がされた。1 つ目は、尾鷲市のフィリピン出身の ALT に、フィリピンの小学校を探してもらう。2 つ目は、第一著者が留学していたアメリカで、小学校を探すことである。この 2 つの方法での交流校探しは厳しいと考えた。

フィリピンは時差が 1 時間 (日本よりフィリピンが 1 時間進んでいる) であるため、リアルタイムの交流は可能である。しかし、英語が公用語の 1 つであるフィリピンの小学生

は、日本の小学生より高い英語力があると考えられた。発達段階は同じでも英語力が違いすぎると、双方にとって負担になると考えられた。また、アメリカの小学校との交流は、16時間の時差（日本よりアメリカのアリゾナは16時間遅れている）であるため、リアルタイムでの交流は不可能であり、英語が母語の小学生との交流はさらに負担が大きいと考えられた。

第一著者は10年以上の留学経験がある。留学中は、東・東南アジアの留学生との交流において、文化的に似た共通項（例：ドラえもんを見て育った、年功序列等）があり、正確でない英語でも気負いすることなく、楽しく交流できた。そこで、韓国や台湾の小学校との交流を提案し、交流校を探すことになった。

第一著者は、台湾の研究をしている第二著者に交流校探しの相談をして、三重県観光局海外誘客課の安藤さんを紹介してもらった。台湾に駐在経験がある安藤さんには交流校探しについて様々な支援をしていただいた。まず、交流校探しの募集をかけるために、賀田小学校の紹介と、交流先に求める条件を記載したチラシを作成することについての助言であった。賀田小学校（海沿いの小規模校）の紹介文は容易に作成できた。条件については「交流してくれるならどこでもいい」という漠然とした条件では、無数の応募があることなどが危惧され、具体的な条件を付けること等を助言していただいた。

そこで、以下の3つの条件を挙げた。1つ目は、児童の年齢である。賀田小学校では6年生が交流を希望しているため、条件として11～12歳の児童とした。2つ目は、児童数である。賀田小学校の6年生は11名であるため、同程度の児童数の学級とした。3つ目は、交流には様々なやり取りが必要であるため、英語でのやり取りができる教員がいる学校とした。こうして完成したチラシは、三重県職員の山際さんが出向している日本台湾交流協会高雄事務所を通して、高雄市の教育委員会にあたる高雄市政府教育局に持ち込まれた。そして、交流を希望してきたのが高雄市にある興達国小学（以降、「興達小学校」と呼ぶ）である。山際さんには、日本台湾交流協会高雄事務所の台湾人スタッフとともに興達小学校を訪問し、海沿いにあるICTの活用した教育に力を入れている素晴らしい学校であることを確認していただいた。

4. 令和3年度の交流

4.1 準備

第一著者は、興達小学校教頭である李主任と、英語科担当の Evelyn（エブリン）先生とメールでやり取りをし、令和3年度に2回の交流をすることになった。交流は、リアルタイムでオンライン会議システム Google Meet を使って行うため、インターネット接続

や交流内容の打ち合わせをするために、秋にオンライン打ち合わせをすることとなった。打ち合わせ参加者は、賀田小学校からは著者らや賀田小学校の教員、興達小学校からは李主任と Evelyn 先生、そして、日本台湾交流協会の山際さんと台湾人スタッフであった。

この打ち合わせでは、賀田小学校の既存の ICT 機器等を使って行われた。児童用タブレットを Wi-Fi (無線) でインターネットにつないだが、台湾とのやり取りに数秒のタイムラグがあり、さらに音声途切れるためにやり取りの内容が理解できず、ICT 環境の調整が必要であることが分かった。



図 1：第 1 回オンライン会議の接続の様子 (賀田小学校)

そこで、尾鷲市と紀北町の小中学校の教育支援のための機関である紀北教育研究所にお願いして、ICT を活用した教育について研究をしていた三鬼先生に支援を依頼した。三鬼先生のアドバイスは、スペックの高い教員用パソコンを LAN ケーブル (25 メートルの「有線」) でモデムに直接つなぐことでタイムラグの解消をし、パソコン内蔵のマイクではなく高性能なスピーカーフォン (東紀州サテライトから貸し出し) を使用することで音声を改善するものであった (図 2)。タイムラグや音声はかなり改善されたが、英語を母語としない 2 者間の交流において「ベスト」な状況ではなかった。しかし、インターネット環境の脆弱な尾鷲市でできる対策はすべて講じた形である。



図 2：第 2 回オンライン会議の接続の様子 (賀田小学校)

4.2 第一回交流

2 回のオンライン会議のあと、賀田小学校と興達小学校の児童の交流授業が 12 月に行われた (表 1)。クリスマス前ということもあり、クリスマスの歌 (“Oh, Christmas Tree”) の 1 番を興達小学校、2 番を興達小学校の児童がそれぞれ英語で歌った。タイムラグがあるため、合唱はできなかった。次に、第一著者がゲーム 1 を、Evelyn 先生がゲーム 2 を担当し、児童たちがゲームに参加した。最後に、興達小学校の児童が「涙そうそう」を日本語で歌い、賀田小学校が映画「となりのトトロ」の「さんぽ」を歌った。

表 1：第一回 (12 月) の交流内容

	内 容
1	クリスマスの歌
2	ゲーム 1 (○×ゲーム)
3	ゲーム 2 (Who am I?)
4	歌 (興達小学校)
5	歌 (賀田小学校)

交流後、児童に感想を聞いたところ、「1 回も英語を話す機会がなかった」という児童がいたことが分かった。これは、児童数 11 の賀田小学校だけでなく、児童数 26 の、興達小学校でも同じ状況であることが推測された。そこで、第 2 回交流では児童全員の英語を

三重大学東紀州教育学舎による国際交流支援－三重県のへき地の子どもたちに「英語が通じた！」体験を－
話す機会がある交流内容にすることにした。

4.3 第二回交流

第2回交流は、1月中旬に行われた。これは、興達小学校が旧正月（1月下旬）の休みに入る前のタイミングであった。交流内容は、各校の児童がグループに分かれて、わが町紹介をすることであった。賀田小学校の児童は2～3人で1グループとなり、尾鷲の食べ物（例：六方焼、からすみ等）や熊野古道について、紙芝居形式で紹介した。興達小学校の児童は、グループごとにパワーポイントで動画を作成し、わが町紹介をした。グループ発表後に質問タイムが設けられ、「六方焼は五角形なのに、どうして六方焼と呼ぶのか？」等の質問が交わされ、第一著者や Evelyn 先生の通訳を介して、やりとりをした。

交流後、児童に感想を聞いたところ、「発表内容を暗記するのがしんどかった」という感想が多かった。日本の小学生の英語力では、簡単なゲームはできても、自分の考えや気持ちを伝えることは負担であることが分かった。また、賀田小学校教員にとっても負担が大きく「来年度以降、国際交流授業を続けない方針である」ことが、東紀州サテライトに申し入れられた。こうした形で、東紀州サテライトと尾鷲市教育委員会の3年間に渡る共同研究も終了した。

5. 令和4年度の交流

令和4年度になり、賀田小学校のほとんどの児童が進学する輪内中学校から「交流授業を引き継ぎたいので支援して欲しい」という依頼が、東紀州サテライトに寄せられた。東紀州サテライトと尾鷲市教育委員会との共同研究は終了していたが、東紀州サテライトの地域貢献活動の一環として、国際交流授業を支援することとなった。昨年度は「発表内容を暗記するのがしんどかった」という児童の感想があったので、今年度は「自分の考えや気持ちをやりとりすることができる英語力」をつけた輪内中学校2年生と、興達小学校6年生が交流することになった。台湾では、「バイリンガル国家」を目指して早期英語教育に力を入れており、公立小学校では1年生から英語教育が行われている。中学2年生と小学6年生では発達段階は異なるが、英語力という点では近いことが推測され、負担が少なく交流ができることが考えられた。

また、輪内中学校では、国際交流授業に複数の教科で取り組む体制をとった。英語の発表内容は英語科、スライド作成は技術科、台湾についての事前学習は社会科で取り組むことになった。社会科の取り組み「台湾について」は、第二著者が輪内中学校で出前授業を実施した。

6. 「台湾について」 出前授業

6.1 授業概要

本授業は、2022 年 10 月 19 日 (水) 13:00~13:45 (45 分間) に尾鷲市立輪内中学内で実施した。参加したのは、生徒 9 人、輪内中学教員 3 人、三重大学教員 4 人 (授業者を含む) である。授業では、パワーポイントのスライド、関連するウェブサイト、絵本、動画を資料として用いた。授業の流れと内容は次の表 2 の通りである。

表 2：授業の流れおよび内容

1	ウォームアップ	日本から台湾までの距離、尾鷲市からの所要時間、台湾の気候・当日の天気予報、クイズ (2 問)
2	台湾の基本情報	概要 (名称、面積、人口、人口構成)、2019 年の訪日外国人数のデータ、ウェブサイト「キッズ外務省」「外務省」閲覧
3	日本と台湾の関係	台湾の多言語社会と歴史的背景、台湾で取り上げられた日本に関する最新ニュースの紹介
4	台湾の言語・文化・習慣等	春節 (1 月 1 日) ・端午節 (5 月 5 日) ・中秋節 (8 月 15 日)、絵本『123 到台湾』の紹介、街並み (台北・台南・高雄の各都市、菜市场、廟、教会、原住民施設) や食べ物 (朝食、軽食、夜市、タピオカ) の写真、台湾新幹線、映画、小説、台湾の英語教育

6.2 授業のねらい

授業者の専門は日本語教育である。今回の授業は、2013 年から新型コロナウイルス発生以前の 2019 年まで、台湾で調査を行ってきたことから、担当することになった。しかし、日本語を母語としない中高校生に第二言語として日本語を教えることはあっても、日本人生徒を対象に授業をした経験はなかったため、事前に東紀州の教員から助言を受けた。中学生の普段の様子や彼らの興味・関心について情報を得る中で、最も重要なのは、中学生に台湾を身近に感じてもらうことであることが明確になった。言語習得という視点に立てば、英語教育と日本語教育に共通するのは、「相手とコミュニケーションしたい」という相互理解への動機づけ、生徒の発達段階に応じて楽しさや達成感を体験することができるような意味のあるやりとりが生まれる仕掛け作りが重要だという点である。これらを踏まえ、次の 2 点に留意し授業を組み立てた。

第一点は、台湾の小学校との交流が円滑になるよう、生徒が英語でコミュニケーションしていきたいという動機付けにつなげることができるよう、身近な話題を主に取り上げ、授業者が 2019 年の時点で撮影した、街の様子、現地の小学校の構内および給食風景を見せることにした。また、一方向で単調な講義にならないよう、生徒に質問したり意見を求めたりしながら双方向性のあるやりとりを行いながら進めることにした。

第二点は、中学2年生という年齢を考え、交流先の台湾における英語教育についても取り上げることにし、日本との歴史的なつながりについても触れることにした。現在、日本と台湾の関係は良好ではあるが、歴史的には複雑な背景がある。中学2年生であれば、既にニュース等で台湾について見聞きしたことがある生徒がいることが予想されたが、先入観、ステレオタイプのイメージに偏ることなく、交流が良好な雰囲気楽しく進められ、それぞれが多角的かつ客観的に活動を捉えられるよう留意した。

6. 3 授業内容および流れ

授業の冒頭では、ウォームアップとして、尾鷲市から飛行機で台北まで行く際にかかる時間、台湾の気候について取り上げた。外部のウェブサイトを利用し、当日の天気・気温を紹介した。東紀州の教員の助言により、映画『千と千尋の神隠し』を手がかりに話を広げ、クイズを2問出した。1つ目は、「肉圓（バーワン）」の写真を見せ、どのような食べ物か想像してもらった。「肉圓」は、主人公・千尋の両親が映画冒頭で口にしたり、丸くて弾力のある食べ物に似ているのではないかという意見がインターネット上で散見される、サツマイモのデンプンの生地の中に、豚肉や椎茸などの具材を入れて蒸す等の調理法で作られる伝統的な料理である。2つ目の質問では、千と千尋の神隠しの舞台に似ていると囁かれる九份の写真を見せた後、「『九份』はあるが『十份』もあるか」尋ねた。十份は実際に存在しており、十份がある新北市は三重県と観光協定を結んでいる。クイズの答えとともに、「平溪国際天燈（ランタン）祭り」では、三重県のランタンを空に飛ばすなどしていること、三重県の松阪商業高校と新北市立三重高級商工職業学校が姉妹校になっていることも紹介した。クイズでは生徒から自由に意見が出されたことから、リラックスして授業に入ることができたように見受けられた。

次に、台湾の基本情報として、名称、面積、人口、時差、人口構成を示し、台湾が日本を近い存在だと捉えていることを表す資料として、2019年の訪日外国人数のデータを用いて、中国、韓国に次いで3番目に訪日人数が多いこと、また、訪日率（総人口からみる年間訪日客数の割合）として、台湾の人口約2300万人に対し、20.7%であることを示した。また、中学生にとってより身近に調べ学習ができる「キッズ外務省」のホームページを検索した。「キッズ外務省」内に台湾の記述はないため「外務省」のホームページに移動し、「日台関係」の「基本的枠組み（「台湾との関係は1972年の日中共同声明にあるとおりであり、非政府間の実務関係として維持されている。」）を確認し、同ホームページ内の「基礎データ」を全員で閲覧した。そして、日本と台湾の関係について、現在も日常的に使われている台湾に残存する日本語の有無に関するクイズを行った（図3）。さらに、台湾の英語教育の背景にあると思われる、多言語社会、歴史的変遷、日本との関わりにつ



図 3：出前授業の一部スライド

いて、日本統治時代の建物やかつて日本語教育を受けた、いわゆる「日本語世代」と呼ばれる方の写真を見せながら簡単に紹介した。また、同月 10 日に京都橘高校吹奏楽部が台湾で演奏を行ったニュースが話題になっていることに触れた。

最後に、台湾の文化や習慣を紹介した。台湾の行事に関するクイズを行った後、絵本『123 到台湾』を用いたり、授業者が実際に撮影した街並み、食べ物の写真を見せたりして説明した。また、出前授業前に読書をしている生徒がおり、読書に興味がある様子であったことから、日本と台湾に関連する映画や小説を紹介した。そして、台湾の小学校の校内の様子および給食を見せた後、台湾の小学校で英語教育がどのように行われているかを小学校 1 年生の英語の教科書を見せながら説明した。

6.4 まとめと今後の課題

英語での交流を終えた生徒および教員各 3 人に、出前授業について、10 分程度でインタビューを行った。以下にインタビューの回答を示す。なお、音声はそのまま文字化し、漢字仮名交じりで表記した。丸括弧内は筆者による補足である。

生徒3人（以下、A、B、C）には、①出前授業を通して、思ったこと、感じたこと、②受けてよかったこと・よくなかったこと、もっと取り上げてほしかったことを聞いた。①について、生徒Aは、「そもそも台湾についてのことを、歴史とかそういうことも含めて全然知らなかったの（中略）文化とかそういうのも学べた」「日本で普通に使ったことばが台湾でも使われている」ことが印象に残ったと述べた。生徒Bは、「日本から近いのにも関わらず（中略）交流があると印象があまりなくて、私もなかなかその台湾のことについて知っていることは少なかった」「日本語の言葉が使われているとか、日本の家屋が、台湾に日本風のがあしらわれてるとか、そういう日本とのつながりっていうのが感じられて、その日本の距離は案外今でも近いんだと思って。昔の争いとかを超えて、今つながりがあるのが知れてそれは嬉しかったです。」と語った。また、学ぶ前と比べ「今だったら私も一回台湾行ってみたいと思います」と述べ、授業で紹介した食べ物を食べてみたいと希望を述べた。生徒CもA、B同様に「（授業前は）私の台湾の印象があんまりなくて」と述べたが、「（授業で台湾の）話を聞いてるとなんか案外日本と似ているところもたくさん出てきて、こう、映画とかも日本の場所で撮ったり台湾の場所で撮ったりとか、台湾をモチーフにしているのを知って、思ってたより近い、近い国なんだなって思って」と話した後、「でも、日本では全然見たことがない食べ物があったりとかして、その独自の文化っていうのは、そこは違うんですけど、ある意味日本の独自の文化があって台湾も独自の文化があるっていう」ことについて「面白いなと思っていました」と話したことから、それぞれの共通点と相違点への気づきを得たことが窺われた。②について、生徒Aは、「自分たちは台湾、親しい関係とかいうのは知らなかったけど、でも台湾の人から見たら日本に来る人とかもたくさんいるし、その日本人、有難いっていうか、なんて言うか親近感？持ってくれてるっていうのを知って」心理的抵抗感が薄れたと述べた。生徒Bは「向こうの（台湾の）ことを知っていると知らないのでは、実際接してみたときの印象もやっぱり違いますし（中略）向こうのことを知らないと、こっちもどう接していいのかわからないので、その点ではやっぱり事前に学んでおけたのはよかったなと思（います）」と述べた。生徒Cは「思ってたより台湾の人たちが私たち日本人に好印象を持ってきて、そこが驚いて（中略）あんまりなんか日本好きじゃないやろうなって思ってたんで、そこでも私があんまりいい印象を抱いていないっていうのに気づいて、こう話を聞いていくうちに、あの、どんだんなんか、えじゃあこれはどうなんだろうっていう、なんか話をしてみたい気持ちが生まれて、次のきっかけにつながるような話になったかなと思いました」と述べた。

教員3人（以下、D、E、F）には「出前授業が生徒にとってどのようなものだったか」

を尋ねた。D は、「尾鷲の子どもたちは、海外の子どもたち、今回台湾と交流させてもらった、お話聞かせてもらったりとかもとっても新鮮で、子どもたちは全然遠いものだったのがとても身近に感じる事ができたと思います」と述べた。また、出前授業の後に交流したことについては「すごく安心感があった。中学生にとって。やっばこう、海外の人っていうのはなんか別世界の人 (みたいな見方) が (あったが)、なんかすごい身近に、あの一交流する前にお話を聞いてあの子たちの壁が取れたかなって気がしました。」「遠い台湾がすごい身近に感じられた。」と話した。E は「今から学ぶ、交流する台湾について事前にお話をしていただけただっていうことは非常に本番の交流に向けてもよい学習という風になったと思います。特に自分たちの知っているアニメーションであるとか、映画のそういったところからも台湾についての話も聞けたし、とても身近に感じられた、興味を持てる、そんな学習にしていただけただかなって思います。より効果的な学習につながったかなと思います。」と振り返った。F は「子どもにとってよかったのはせっき交流するなら (相手のことを) 分かったこと、ちょっとでも知れたこと」「実際 (現地の台湾に渡航したことがある授業者のような) 知っとる人に (台湾の話を) 聞けたことがよかった」と答えた。

以上、生徒へのインタビューからは、もともと台湾のことへの興味・関心が薄く、また台湾から日本へ向けられるまなざしがネガティブなものであるのではないかという印象を持っていたことから、若干の緊張があったことが窺えたが、出前授業により、そうした点ばかりではないことにも気づくことで、英語で交流し、コミュニケーションすることへの動機づけにつなげることができたものと思われる。また、教員のインタビューからも「遠い台湾が身近に感じられた」ことが学習への効果に寄与したのではないかという見方が共通して述べられた。交流への「壁が取れた」という教員 D の発言は非常に示唆的であった。

出前授業は当初のねらいを達成したものと思われ、英語での交流に向けた事前学習としてなんらかの貢献ができたものと考えられる。しかし、課題もある。授業の時間配分と話題については精査する必要があった。授業時間に対して準備した話題が多く、質問を投げかけるなど、やりとりしながら進めたものの、生徒の理解を確認する時間が十分ではなかった。当初短く紹介する予定だった「日本と台湾の関係」については、予想よりも生徒の反応が得られなかったこともあり、話が冗長になってしまった。授業後に理解が難しいといった表情を見せていた生徒に感想を尋ねたところ、「午後からの授業でちょうど眠くなる時間帯で取り上げられる話題としては難しいものだった。興味はあったが午前中にやってほしかった」といった声が聞かれた。今後、出前授業の機会があるならば、事前に生徒の状況、様子をより明確に把握しておくこと、また当日の生徒の理解度等に応じて、柔軟に授業が進められるような準備が必要だと思われる。

7. 第一回交流

昨年度の交流の経験があるので、今年度はメールで交流内容を確認し、念のためにインターネット接続を確認するためにオンライン打合せをした。打合せには、輪内中学校からは著者らや輪内中学校の教員が参加し、興達小学校からは李主任と Evelyn 先生、そして、日本台湾交流協会の山際さんと台湾人スタッフが参加して行われた。さらに、紀州教育支援事務所で ICT を活用した教育を研究されている田上先生と、小学校英語を研究されている西川先生にも支援いただいた。田上先生と西川先生は、数年前まで賀田小学校の教員だったため、輪内中学校 2 年の生徒にとっては「教えてもらった先生」になる。

今回の交流では、最初に興達小学校がシューベルトの「鱒」を中国語で歌った。次に、各校の 3 グループが「朝食」について発表した。「朝食」は親しみやすいトピックであったようで、両校の児童が頷いたり、歓声を上げたりしている様子が見られた。次に、「Simon Says」ゲームをした。これは、司会者が言った物（例：鉛筆 3 本、消しゴム 2 個等）を探して持

てくるものであった。最後に、台湾の街がモデルとされた映画「千と千尋の神隠し」のテーマソングである「いつも何度でも」を輪内中学校の生徒が歌って、第一回交流授業が終了した。輪内中学校は生徒数 9 なので、全員が英語で話す機会があった。

表 2：第一回（10 月）の交流内容

	内 容
1	歌（興達小学校）
2	朝食紹介
3	ゲーム（Simon Says）
4	歌（輪内中学校）



画像 1：朝食紹介



画像 2：ゲームの様子



画像 3：歌（輪内中学校）

8. アンケート調査

交流後に、生徒アンケートが実施された。輪内中学校では、教育にかかわる生徒アンケートの実施や写真撮影等は、年度の初めに全保護者の了承を得ており、校長判断で実施できることになっている。生徒 9 名からの回答を紹介する。

8.1 質問① 「英語が通じた！」と感じる瞬間があった。

台湾との国際交流の目的は、「『英語が通じた！』体験をさせたい」という賀田小学校

教員の思いで始まった。輪内中学校教員も同じ思いであった。9 人中 6 人が「英語が通じた！」と感じており、以下の感想を寄せている。

感想①「英語の発表をしたら、首をふったりしてもらえた」
感想②「ゲームのとき、自分が英語で言った筆記用具を個数分もってきてくれたとき。」
感想③「映画（千と千尋の神隠し）のことをしているかたずねたとき、うなずいてくれている子がいました。」

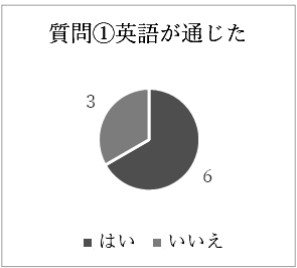


図 4：質問①英語が通じた

8.2 質問② 「相手の英語がすごい」と感じるがあった。

輪内中学校の生徒にすれば、相手は 2 歳年下の小学校 6 年生であるが、彼らは小学校 1 年生から英語教育を受けている。輪内中学校の生徒 9 人中 8 人が、「相手の英語がすごい」と感じており、以下の感想を寄せている。

感想① プレゼン！です。英語力がすごいなあとおもいました。
感想② ほんとうに 6 年生なのかと思った。
感想③ 英語で話すことを当たり前のようにしていて、私たちと比べて積極性があったのですぐいと感じました。

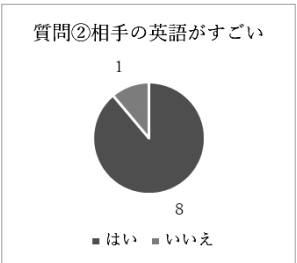


図 5：質問②相手の英語がすごい

8.3 質問③ 国際交流は自分たちにとって意義のあることと思う。

賀田小学校・輪内中学校教員の思い出始まった交流であるが、輪内中学校 2 年生全員が国際交流は自分たちにとって意義のあることと捉えていることが明らかとなった。生徒からは以下の意見が寄せられている。

感想① 自分の英語のレベルが分かった。
感想② 英語はどこでも通じるんだと思った。
感想③ 自分の英語にはあまり自信がなかったですが、伝わるという体験ができたことが良かったです。
感想④ 英語は習うけど、実際にはなすことは少ないから。台湾についての知識は少なかったから。



図 6：質問③交流には意義がある

8.4 質問④後輩に体験してもらいたい

今回の交流を通して、後輩に体験してもらいたいと考えているか質問した。質問③と同様、生徒全員が「はい」と答え、以下のコメントを寄せている。

意見① 私たちにとってとても有意義な時間だったから。

意見② 台湾の人と交流することは滅多にないから！貴重な体験だと思うからです！

意見③ 今後の英語学習に対する心持ちも変わってくるのでは、、、と思うからです。

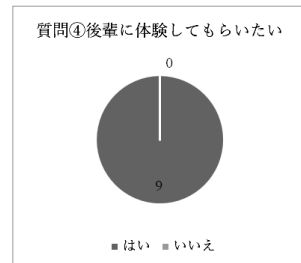


図7：質問④後輩に体験してもらいたい

9. 終わりに

本研究では、東紀州サテライトの尾鷲市立賀田小学校・輪内中学校における国際交流支援を報告した。令和元年度に、地域住民の「グローバル人材の育成を」の要望に応えるために、東紀州サテライトが提案した「9年間カリキュラム」に沿って、両校で義務教育9年間をかけて英語教育に取り組むこととなった。取組3年目の令和3年度に、「児童に『英語が通じた！』という体験をさせてあげたい」という賀田小学校教員の要望に応える形で、東紀州サテライトによる国際交流支援が始まった。

交流校探しにおいて、三重県観光局海外誘客課、日台交流協会高雄事務局に支援いただき、高雄市の興達小学校を紹介していただいた。令和3年度の交流準備においては、厳しいICT環境の中、紀北教育支援事務所の支援や、東紀州サテライトからICT機器を貸し出し、交流を実施することができた。

この国際交流は、令和4年度は輪内中学校の中学2年生が引き継ぐこととなった。輪内中学校では、国際交流に複数の教科で教科横断的に取り組んだ。英語科で英語のプレゼンテーションの準備、技術科でプレゼンテーションのスライドづくり、社会科で台湾の事前学習である。台湾の事前学習は、台湾研究をする第二著者が輪内中学校で出前授業を実施した。令和4年度も、事前打ち合わせ及び第一回交流において、紀北教育研究所、日台交流協会高雄事務局の支援をいただき、東紀州サテライトよりICT機器を貸し出して、10月に交流が実施された。

今回の交流では、生徒全員が発表する機会があり、英語でゲームに参加する機会があった。交流後の生徒アンケートによると、生徒9人中6人が「自分の英語が通じた！」と答えた。国際交流の目的である「児童・生徒に『英語が通じた！』と体験させたい」は、ほ

ば達成されたと考えられる。それに加えて、すべての生徒が国際交流を「意義のある事」ととらえ、「後輩に体験してもらいたい」と考えていることが明らかとなった。

令和 5 年 1 月に、輪内中学校と興達小学校の第二回交流が実施される。今回は、生徒がグループに分かれ「わが町紹介」「日本のポップカルチャー」「学校案内」を発表する。生徒全員が発表する機会があり、「自分の英語が通じた!」と感ずることができるよう、「Do you know~?」のような質問を、プレゼンテーションに入れている。第二回交流後にも、生徒アンケートを実施し、「英語が通じた!」と感ずることができたか調査する予定である。

謝辞

本交流の支援をしてくださった、三重県観光局海外誘客課 (令和 3 年当時) の安藤さん、日台交流協会高雄事務局長の山際さんと台湾人スタッフ、紀北教育研究所の三鬼先生・西川先生・田上先生に感謝します。

参考文献

- 赤松美和子・若松大祐 (2022) 『エリアスタディーズ 147 台湾を知るための 72 章 第二版』明石書店
- 陳盈帆 (2015) 『123 到台湾』聯經出版公司 nmj
- 全国へき地教育研究連盟 (n.d.) 「全国へき地・複式・小規模校リンク」
<<http://www.zenhekiren.net/link/>> (2023 年 1 月 14 日最終アクセス)
- 文部科学省 (n.d.) 「へき地教育の振興」
<https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317809.htm> (2023 年 1 月 14 日最終アクセス)
- 読売新聞オンライン (2022) 「英語のスピーキングテスト都立高できょう初実施…採点はフィリピンで」
<<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/kyoiku/news/20221127-OYT1T50008/3/>> (2023 年 1 月 14 日最終アクセス)